紹介

大井重二郎著
平城京と条坊制度の研究

この本の著者大井重二郎氏は高校の教壇で教鞭をとられるかたわら国文学・国史学に関する幾多の著作をものされていることは周知のとおりである。聞くところによればこの『平城京と条坊制度の研究』で十冊の多きにのぼる。

この著作は戦中に出版された同じ著者の『上代の帝都』の後をうけるものであり、氏のライフワークともいうべき都城制に関するいくつかの論考の中で最大のものである。『上代の帝都』が橿原宮から奈良朝の諸宮までの概説であったのに対し、本著作は平城京のみに関する詳論である。

内容は二つの部門に大きくわけられており、第一の部門では平城京に関する遷都・造営・経過・停廃が詳しく論じられている。その中で造営に関する庶民の苦しみや国家の撫育などが具体的にどのようにして造営過程全体の中に表れてくるかが史料的に多くあげられており、今後この方面の研究にとっては必読の書ともなろう。恭仁宮をはじめ奈良時代は多くの宮殿が造営されているわけだが、その政治過程との関連の中で造営の意味及び規模を探ろうとされる態度は正しいものである。その中でいくつかの創見も加えられている。たとえば平城宮朝堂院の唐招提寺への移建時期についても関野貞・福山敏男両博士を批判され、勝宝年間であるとされている。

しかし若干の不満もあり、たしかに奈良時代の政治過程の中から諸宮の造営が述べられてはいるが、最近の大化改新の研究や内乱に関する業績などが十分に評価されていないきらいがあるのは惜しまれるところである。

第二の部門は平城京の条坊制度に関するきわめて緻密な研究である。この部分が全体の約三分の二をしめており、著者の主要な関心がここにあったことが理解できるし、またそれだけに多くの新しい見解が主張されている。その中の一つが古くから問題になっていていまだに解決をみない平城京の条坊と条里制に関するものである。大化前代の条里制と平城京の条坊は一応無関係であり、四十丈を単位とする坪割の制度は平城京経営で始めて考案されたとしておられる。

中でも注目されるのは平城京の北辺に対する著者の主張であろう。従来は外京と同じく奈良時代に設定された都城の一部をなす地域であるというのが定設であった。これに対して著者は西大寺蔵京北班田図（折込みとして略図があるがより詳しくは『続日本紀研究』六―一〇・一一に同氏編の詳細な図がある。）と西大寺・秋篠寺の争論関係の文書から、平城京の北辺は奈良時代に都城の一部として設定されたものではなく、争論の際に西大寺が一方的に使用したものであるとされている。またこの京北条里と京南条里との従来から問題の多い関係についても新しい知見が示されており、今後の条坊制度の研究にとって重要な提言となろう。

近来平城京をはじめとして飛鳥京、藤原京、長岡京などの発掘が進展しており新しい事実が次々と明らかにされていっている。もちろんこの考古学的な手法を通じての解明もきわめて重要なものではあるが、文献を介しての究明が考古学の調査で明らかに

しえない歴史を明らかにしうるということも事実であり、その意味で著者の意図は叙述の中で十分に果されていると考える。

ともあれ、この著作が今後の条坊制度の研究に対して一つの大きな方向を示したといえよう。著者の今後の発展した研究を望む次第である。

（A5判　本文二四〇頁　付図三葉　昭和四一年九月　初音書房刊　限定五百部　頒価一、五〇〇円）

（井上満郎）

赤松俊秀 監修
日本仏教史　中世篇

近時の日本仏教史の研究の大きな傾向として、狭義の仏教史、つまり教義や宗門史からぬきんでて、これを日本歴史の発達の中で位置づけ、日本文化史・思想史の一環として考えてゆこうとする立場がさかんになりつつあるように見うけられるが、ただいま刊行されつつある『日本仏教史』全三巻（家永三郎監修古代篇、赤松俊秀監修中世篇、圭室諦成監修近世近代篇）は、叙述の重点は、仏教そのものの歴史であるよりは、我国特有の仏教が生みだされ、そして受容されてきた歴史、我国社会の発展と仏教とのかかわり方が、より中心にすえられている。われわれは、すでにそうした仏教史の古典として辻善之助博士の『日本仏教史』全十五巻をもっているが、本書は辻博士ののち顕著な発展をみせた歴史学の成果をふまえて書かれた概説である。以下赤松教授はじめ北西弘・石田善人・今枝愛真・藤井学・黒田俊雄諸氏によって分担執筆されている中世篇について紹介しよう。

さて、仏教史の中世は、政治史上の中世、すなわち鎌倉・室町・戦国時代と一致してとらえられる。この時代は、混乱と反逆に終始したかにみえながら、武力支配が完成し、農民の自立が顕著となり、また商工業の活動が活発となった、激動の、そしてみのり多い時代であったが、中世仏教はこの「政治・経済・社会のそれぞれの発展に即応して展開した面が顕著であり、その対応のしかたが特に活発で」、「中世仏教のあり方が日本仏教のそれを代表する」ととらえられる。そうした中世仏教は、一つは法然の専修念仏において、一つは栄西の禅宗において成立した。専修念仏成立の意義は、その浄土観念よりも、貧窮困乏・愚鈍下智・少聞少見・破戒無戒の俗世間の衆庶の救済を仏の本願としたことにあり、平安末―鎌倉初期の荘園の変化、武家政治の成立という時代にあって、俗世間の倫理観念の発達がその基盤となった。一方禅宗は、鎌倉時代に再興された律宗とともに、出家仏教が我が国ではじめて確立したものと評価されるが、その背景も「武士・農民・商工業者らのたくましく正しい生存意欲のささえなくしてはあり得ない」とされる。

こうして、専修念仏の在家仏教、禅律の出家仏教ともに、その対応はあい対立しながらともに仏教者が時代の苦悩を体得することによって成立した中世仏教は、法然門下の分流、親鸞、一遍と時宗、鎌倉禅の勃興、五山派の展開、道元・宗峰・関山の門流、日蓮と法華教団、旧仏教の中世的展開、と展開して叙述され、最後第六章に中世社会と仏教の一章をたて、荘園制社会と仏教、一向一揆、法華一揆、篤信の諸相、中世仏教と文芸・美術に項を分って概観されている。このうち荘園制社会と仏教、では、呪術と多神観にいろどられた荘園制社会の宗教観が、村落共同体が成長し村堂と講が出